

---

# 君に届け

新明 聖凰

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君に届け

### 【Nコード】

N7014D

### 【作者名】

新明 聖凰

### 【あらすじ】

神武龍に彼女が出来るが、付き合いきつかけとなる事件が起こる。  
その真相は…？

## 第1章：プロローグ

高校1年の2月14日（火）、神武 龍に初めての彼女が出来た。

名前は天野 照美。同じ××県立H高校の1年生でクラスも同じである。

照美の顔はある程度整ってはいるが、眼鏡をかけ、物静かで休み時間は読書に没頭している。そういった訳で友達も少ないようだ。

入学したときは、周りも友達探しが必死で、声をかけられている姿も見しかし段々と学校生活に慣れてくると、それもなくなった。

唯一、声をかけられているのは宿題が難しい時ぐらいだ。特に英語なんかは中学の時と、比べほどにならないくらい難しくなった。

照美は、勉強が出来、いつも学年でトップクラスにいた。

龍の成績はというと中の上といったところだ。勉強はきらいではないが、好きでもない。運動神経もほどぼだった。つまりパツとしない男である。

そのため今まで彼女も出来たことはない。いつも目立たないように真面目に過ごしていた。目立たないようにしていたが友達はずいぶん少なかった。

付き合い方ようになったが、元々照美のことは特に意識していなかった。どちらかといえばもっと派手な方が好みだった。その時は、まさか照美と付き合い方になるとは思ってもなかった。

あの事件が起きるまでは。

## 第1章：プロローグ（後書き）

初めまして神明 朱雀です。初めての小説で緊張しています。沢山の人の読んでもらえると幸いです。これから宜しくお願い致します。

## 第2章：翔太と晴起

平成20年2月9日（木）、いつものように安倍 翔太と森永晴起と共に昨日見た音楽番組について語り合っていた。

翔太は茶髪で強面だが、根は優しい奴であり、運動神経は抜群だが勉強はいまいちである。

晴起は丸い眼鏡をかけ、黒髪の坊ちゃん刈で背は低い。パソコンが大の得意である。

いつもこの3人で行動する。話が合うということもあるが、1つだけ共通していることがある。それはいわゆる超能力という類のものだ。

翔太の持っている能力は、手から火を出すといったもの。正確には指を鳴らすと火が出るのである。

小学校4年生の時に初めて気づいたと教えてくれた。その当時、指を鳴らすことが流行っていて、翔太もやってみたところ、音ではなく火がでて周りを驚かしたという。

指鳴らしにはまってしまった翔太は、火を大きくしようと練習していた時、近くにあった宿題プリントに燃え移り、火事になりかけ両親にかなり怒られたと言っていた。

それからは学芸会などの行事でしか見せていないらしい。それでも翔太は練習を続け、火の大きさを調節出来るようになった。

晴起の持っている能力は、パソコンを通じて人々の独り言や噂、情報などを自由に読みとる能力である。

実際に見せてもらったが、晴起がネットを開くと様々な情報が飛び交っていた。

K高校の誰と誰が両思いだとか、同じクラスのN君は照美に対して意地悪であるが、実は好意を抱いているとか、その人自身しか知らない情報も多々載っていた。

しかし晴起以外の人間がそのホームページにいかうとしても存在しない。

晴起がこの能力に気づいたのは、中学2年生のパソコンの授業でのことだった。

初めて触るパソコンに感動し、いざホームページを開いてみるとこのページが開いたらしい。

初めは特に気にしていなかった晴起も内容を読むうちに青ざめたそうだった。

そこには同じクラスの男子や女子の晴起に対する意見が沢山書かれていたからだ。それも悪いものばかり。

晴起は近くにいた男子に聞いてみるとまんざら嘘でもないようだった。

その男子は驚いて晴起に事情を聞き出し、ホームページを友達と探したそうだが見つからなかったらしい。

それから晴起は、自分だけの能力だと理解し、活用しているそう  
だ。

### 第3章：龍の過去

龍の能力は、翔太のようにかっこよかったり、晴起のように役に立ったりといったものではない。

人と会話する能力である。会話と言っても頭の中でする会話のこと。一般的にはテレパシーと言われている。

この能力は龍が幼稚園児の時に開花した。

龍は人見知りが激しく、友達もいなかった。心の中では誰かと遊びたいと思っていたが、声をかけることが出来ず、いつも1人でいた。

そんなある日の夜中、なかなか寝付けず、ふと憧れの的で1回だけ話したことがある南野 章子ちゃんとはなしたいなと思っていた時、

「あなたは誰？」

と頭の中で聞こえたような気がした。気のせいだと思い、また同じように思っていると、

「だからあなたは誰？」

そう聞こえてきた。少し怖くなり、

「君こそ誰？」

そう問いかけると、

「私は章子。南野 章子。」

と答えが返ってきた。龍は嬉しい反面どう話をしたらいいのかわからず、冗談半分で、

「僕は、僕は…お化け。」

と答えていた。

次の日、母親に連れられて幼稚園に行くと、何やら母親同士が集まって、深刻そうに話をしているのが見えた。中には涙を流す人までいる。

不審に思った龍の母親は、その集団の1人に話を聞いてみた。

「何かあったんですか？」

すると、

「実は…南野 章子ちゃんが亡くなったの。」

龍は驚き、その人に尋問するように聞いた。

「どうして？どうして章子ちゃんが死んだの？どうして？」

そのおばさんは、龍がいつもおとなしいのを知っているため、突然の豹変に驚いてはいたが、相手が子供であることを忘れて全て語った。

「聞いた話によると、昨日の晩に変な声が聞こえると言っていたそうなの。章子ちゃん是谁なの？って聞いたらしいわ。そしたらお化けって言ってきたみたい。章子ちゃんは大のお化け嫌いだったらしいから、すぐく発狂したらしいわ。そしたら突然家の外に飛び出してトラックにはねられたそうよ。」

それを聞いた龍は、なぜか冷静に判断した。この事は誰にも話さない。もちろん翔太も晴起も知らない。

それから龍はこの能力を使わず、翔太と晴起に出会うまで、普通の人間として生活してきた。

今では授業中や家にいるときも、携帯より安く、しかも確実に相手と会話できるこの能力を重宝している。

もちろん携帯電話は持っている。この能力にも限界があるからだ。

この能力は、誰にでも話しかける事が出来るかというところという訳ではない。3つの制約がある。

まず、会話したことのある相手でないといけないこと。

次に、自分からしかテレパシーを送れないこと。

最後に、相手の顔を思い浮かべることが出来ること。

つまり話したことはあっても顔が思い出せない人には使えない。

しかし、制約がある反面メリットもある。

それは、1度に数人と共に会話を交わすことが出来るのである。

この日も、6時間目の英語を受けながら、翔太と晴起と会話していた。

もちろんテレパシーで。

「早く終わらねーかな。」

翔太が呟いた。龍は、

「どうした？」

「どうせゲーセンのことでも考えているんだろ？」

晴起が突っ込むと、

「実は、親が離婚して母親に引き取られたから家計が苦しくてさ。バイトしてるっていうわけ。」

「それは大変だな…。」

龍も晴起もそれ以上言っただげられることが出来なかった。

その時、龍の横で何かが落ちた。

見ると、女子が持ちそうなかわいらしいクマの絵が描いてある消しゴムが落ちていた。

それを拾い、キョロキョロしていると、

「それ私の。返してくれる？」

声の主は照美だった。龍の席は、左端の列の前から4番目で、照美の席は右斜め前の席。

龍はかわいい消しゴムだねと言いながら消しゴムを返すと、照美は顔を真っ赤にして受け取り、何かを妄想したのか首を必死に振っていた。

照美の顔を見た龍は、少しドキツとしながら、なぜか龍まで顔が赤くなっていた。

ふと2つ隣の席に座っている翔太と、翔太の隣に座っている晴起が何やらニヤニヤしながらこちらを見ていた。

すかさず龍は、テレパシーを送った。

「何ニヤニヤしているんだよ。気持ち悪い。」

「いやー、龍は天野さんのような人がタイプなのか。フムフム。」

晴起がそついうと翔太も、

「お似合いだぞ。俺は応援しているからな、頑張れよ。そうそう、結婚式には呼んでくれよ。」

「タイプじゃないって。それに結婚式って先の話すぎるだろ。」  
と言いながらも、龍の顔はさらに赤くなった。翔太も晴起も微笑ましく見ていた。

## 第4章：事件前日

その日は翔太がバイトのため、ゲーセンには行かず、晴起の家にいった。

晴起の家は学校から徒歩で10分くらいのところにある。

高級住宅街に建つ、一際大きな家に龍は、いつ来ても驚く。

2階にある晴起の部屋に入ると、パソコンに関する雑誌やソフト、分解したパソコンなどが隙間なく埋め尽くしていた。

「適当に座つて。今お菓子と飲み物持ってくるから。カルピスとメロンソーダのどっちがいい？」

「カルピスがいい。」

「OK。ちょっと待ってて。」

そう言うつと、勢いよく階段を駆け降りていった。

龍は部屋を眺め、興味深いものを見つけた。

それは晴起が密かに集めても様々な事件のファイルであった。

そのファイルには、

「晴起が解く、殺人事件集」と書かれていた。  
手にとってまるとずっしりと重い。

中には事件の詳細が書かれ、晴起の能力によって得た情報なども

書かれていた。

晴起は警察に助言をし、解決に導いたこともある。

晴起は自分の能力を最大限に活かし、人助けをしている。

龍はそんな晴起を尊敬していた。

141号のファイルには、最近起きた誘拐殺人事件のことが載っていた。

女子高生ばかりを狙っている凶悪殺人事件である。

犯人の情報はあまり書かれていない。調査中なのだろう。

殺害された女子高生は皆、龍の通っているH高校から遠くなく、学校の教師たちも注意を促していた。

そこへ、ポテチとカルピスを上品なお盆に乗せて晴起が入ってきた。

「あーその事件ね。なかなか手掛かりがなくて困っているんだ。僕  
の能力でもダメだった。どうしてかな？」

「もしかすると何かの能力者かもよ。」

「その可能性が大きいかもね。」

「でも、俺のテレパシーじゃどうすることもできないな。」

「そんなことないよ！犯人と一言でも話さえすれば、後は聞き放題だぜ。」

「犯人と話なんて、そうそうできるものじゃないだろ？」

「それがそうとも限らないんだよ。実は、僕の中で容疑者が1人だけいるんだよ。」

「何だつて？それは誰なんだ？」

晴起は少しだけ沈黙した。そして、

「その人は…小野先生なんだよ。」

小野先生は今年からH高校に勤務することになった先生で、性別は男、年は24歳。1年生の英語を教えている。今日の6時限目も小野先生の授業だった。

小野先生は、インテリでカッコ良く、女子生徒に人気があった。

そんな先生が殺人など犯すだろうか？

はつきり言つて信じることはできなかったが、能力者の晴起が言うのだから、何か根拠があるのだろう。

「その根拠は？」

「今までに殺された女子高生の生きていた頃の意志を探ってみると、高校教師のO・Tと会つて共通して書かれていたんだ。どこの高校かはわからないけど。」

「いくら小野 正でO・Tといつても、小野先生とは決まったわけではないだろ？小野先生は、入院して勉強が遅れていた俺にも分か

り易く教えてくれんだぞ。そんな訳ないよ…。」

「僕も小野先生じゃないことを祈っているよ。だから、僕の意見として覚えていてほしい。」

「俺にも手伝わせてくれないか？」

「喜んで。そうだ！翔太にも協力してもらおう。相手が武器持ちだったら、翔太の火鉄砲は役に立つ。」

「そうだな。翔太には俺から伝えておくよ。そろそろ帰らないと親がうるさいから帰るよ。また明日な。」

龍は家に帰ると、翔太に晴起と話したことを説明した。

翔太は快く了解し、やる気満々の様子だった。バイトは休むそう  
だ。

そして、いつもは目を通さない新聞にも目を通し、父親に感心されながら事件の内容を全て頭に叩き込んだ。

昔から龍は頭が良く、勉強すれば良い成績を残せる子だったので、それほど難しくはなかった。

その日は、様々な気持ちが入り交じる中、深い眠りに落ちた。

## 第5章：捜査開始

2月10日（金）、照美が休んでいた。

担任の岡 雄一先生が言うには、照美は昨日塾に行ったつきり帰ってこないらしい。

母親が心配して色々なところに電話をしたらしいが、塾生も帰り道で分かれてからは知らないという。

心配になった母親は警察に搜索願を出したが一向に手がかりが掴めていないようだ。

何か知っていることがあったら教えてくれと岡先生は眼を潤ませながら頭を下げた。

龍は翔太と晴起にテレパシーを送った。

「この事件どう思う？例の事件と関係あると思う？」

「関係あるんじゃない？女子高生っていうキーワードにも当てはまるし。」

翔太は素早く答えた。

「そうだね…可能性は高いかも。でも今ここで小野先生にテレパシーを送るのは止めた方がいいと思うよ。もし犯人だったら焦って天野さんを殺すかもしれない。送るのだったら天野さんにすれば？消しゴムの件で話したことあるだろ？」

晴起は冷静に、しかも的確に助言した。

「そうか、その手があった。わかった天野さんにテレパシーを送ってみるよ。」

「いや待った。明日から2日休みだろ？今日から家に泊まりに来なよ。3人で捜査しよう。だから今日学校が終わってから送れば？」

晴起がそう提案し、龍と翔太は合意した。

放課後、3人は晴起の家に行き、早速捜査を開始した。

「じゃあテレパシーを送ってみるよ。」

「気をつけるよ。相手がびっくりするだろうから。」

晴起と翔太は固唾を吞んで見守った。

龍は意識を集中させ、照美との脳波回線をつないだ。

「天野さん、聞こえる？びっくりさせてごめん、同じクラスの神武です。」

「…き、聞こえるわ。でもどうして…？少しパニックってるわ。落ち着くまでちょっと待ってて。」

龍は言われた通り少し待った。

「…お待たせ。で、どうして私に神武君の声が聞こえるの？」

龍は一通り説明し、照美は案外すんなりと受け入れた。

実は、照美はオカルト系に興味を持っており、図書館等でよく本を読んでいるようだ。

「天野さんはどこにいるの？」

「それが塾帰りに急に襲われて気付いたら知らない部屋にいたの。窓は一つあるけど、それ以外はトイレが端に設置されているだけの部屋。」

「窓からは何が見える？音は何か聞こえる？」

「窓からは…展望台のような物が見えるわ。どこかで見たことあるんだけど思い出せない。音は何も聞こえない…え？さっき悲鳴のよな声が聞こえたわ。何かしら？」

「きつとテレビだよ。今サスペンス物やってる時間だし。なるべく早く助けに行くから、それまでは頑張つて。」

「分かったわ。ありがとう。それで、一つだけお願いがあるんだけど…。」

「何かな？何でも言つて。俺に出来ることであれば何でもするよ。」

「暇な時間があつたら話し相手になってくれない？1人で寂しくて…。」

「いいよ！いくらでも話し相手になるよ。天野さんのことは必ず助

けるから！」

照美との会話は一旦中断し翔太と晴起に報告した。

晴起はパソコンで調べたことについて報告した。

晴起の報告によると、塾から現場まで車で15分くらい。

つまりH高校に来る生徒が通える範囲内であること。今はそのくらい。

「一つ気になったんだけどよ、今の時間サスペンスなんてやってねーぜ。」

確かに翔太の言う通りサスペンスはやっていなかった。

じゃあ悲鳴は何だ？という不安が込み上げてきた。

とりあえずこのことは照美には言わないということで合意した。

「ところで小野先生にテレパシーはどうする？今はまだ犯人と決まったわけではないし、とりあえずピンチになった時の切り札として置いておく？」

「そうだ、そうだ！置いとけよ。もしかしたら一発逆転できるかもよ。」

晴起と翔太に言われ、龍は何としても照美を助けたかったので使わないことにした。

「俺は小野のことについて調べてみるよ。直接尾行してもいいし。いざの時は火鉄砲をお見舞いしてやるよ。」

翔太は銃を撃つ格好をしながらはしゃいでいた。

龍は照美と世間話をしていた。

「実は今日の数学の時間に翔太がよだれを垂らしながら寝ていたんだ。起きてよだれに気付いたと思ったたらいきなり制服で拭くんだよ。周りは皆見て見ぬふりしてたけどな。晴起はおもつきり笑ったので殴られるし、岡先生には怒られるし、晴起も最悪だったんだよ。」

「ははは。森永君も痛かっただろうね。私も見たかったな。」

「…天野さんって笑うんだね。」

「何それ、失礼ね。私だって笑うわよ。学校ではなるべく1人で居たいから澄ましているだけ。そんなに私が笑うとおかしい？」

「全然おかしくないよ。笑ったところを見たことがないので驚いただけ。対面していないから分からないけど笑っている方が可愛いと思うよ。」

龍は言ってから後悔した。

今まで女の子にそんなことを言ったことがないので恥ずかしくてたまらなかった。

照美も恥ずかしそうにありがとうと言ったきり黙ってしまった。

そのままこの日の会話は気まずい形で終了。

「龍さ、顔が赤くなってたけど、君は可愛いね、なんて言っただんじやねーだろうな。」

「龍そんなこと言ったの？やるー！」

「そんなこと言ってないよ！考えすぎ！さあ分かったことがあったら教えてくれ。」

そうは言っただものの龍は内心ドキドキしていた。

翔太も晴起も納得はしていないが、龍が口を割らないのを知っているためそれ以上は突っ込まなかった。

そして、まずは俺からつと言いながら翔太が報告。

「実は、連れに聞いたところ、今日学校に小野の奴は来なかったらしい。無断欠席だって代わりの教師が言っただらしいぜ。ますます怪しいよな。」

「そうか…晴起は？」

「僕の友達が、たまたま天野さんの通っている塾の近くを通りかかったらしいんだけど、そこで小野先生に似たような人を見かけたみたい。あれっと思って振向いたけどもういなかったんだって。不思議なこともあるんだって言ってた。」

「何かの能力を使った可能性があるってことか。」

「そうかもしれないね。」

「翔太と晴起の報告によると小野先生でほぼ決まりってことか？」

「それしかない！」

翔太と晴起は口をそろえて言った。

その日は捜査をそこまでにし、続きは明日にすることにした。

## 第6章：小野 正

2月11日（土）、昨日遅くまで起きていたため、10時になっても皆、いびきを掻いていた。

ようやく起きたのが11時30分をまわってから。

「あー！龍、翔太！早く起きろ！！」

と声を上げたのは晴起。

龍と翔太は声にびっくりしてベッドから落ちてしまった。

2人は時計を2度見してから慌てて服を着替えた。

3人は簡単に朝食兼昼食を食べ、外へと出て行った。

空は快晴だが肌寒い。

そのため龍は、カッターシャツの上に黒のジャケットを羽織り、茶色のマフラーをグルグルと巻いている。

晴起は白のダウンジャケットにニット帽をかぶり、鼻を垂らしながら震えていた。

翔太はスカジャンを着こなし、手をポケットに突っ込んでいた。

持ち物かというと晴起がゴク薄のパソコンを携帯しているだけだった。

「外に出てどうするんだ？」

龍が聞くと翔太は

「張り込みをしようぜ。そして小野を追尾するんだ。」

「それはいいかも。って小野先生の家は知っているのか？」

「それならば僕がパソコンで調べておいたよ。先生の家はここから20分ぐらいのところにある一戸建ての家で、近くに図書館があるみたいだからとりあえず行ってみよう。」

「その前にさ、天野さんの家族に話を聞きに行かないか？手がかりがあるかもしれない。」

「そうだな、行ってみるか。」

3人は照美の家に行き、インターホンを押した。

中から照美の母親が出てきた。

照美の母親はあまり寝ていないのか、目を赤く腫らしていた。

「どちら様？」

「天野さんと同じクラスの神武です。こっちは安倍。それから森永。」

3人は軽く会釈した。

「わざわざどうしたの？」

「えーと、僕たちは探偵クラブで、天野さんの行方を捜しているんです。もしよろしかったら、詳しいことを教えていただけませんか？」

「あらそう、ありがとね。でもこういう危ないことは警察に任せておいたほうがいいわ。」

「僕たちは天野さんと約束したんです。必ず助けると。」

「あら変な子ね。まるで照美と話したみたいじゃない。」

そうは言ったものの、3人が真剣な表情なので話を聞かせることにした。

「わかったわ、ここじゃ寒いから上がって。」

「お邪魔します。」

3人は広いリビングに通され、ソファの上に並んで腰掛けた。

「先に言っとくけど、刑事の人が来たら帰ってちょうだいね。あなたたちまで巻き込むわけにはいかないから。」

「分かりました。お気遣いありがとうございます。早速ですが、天野さんは何か変なことを言っていたりしませんでしたか？」

「刑事さんにも言っただけで、塾が終わってから誰かに会うとは言ってたわ。ただあの子、友達が少ないから、誰にも言ってなかったみたい。あの時誰なのか聞いとけば…」

母親は涙ぐみ、ハンカチで目や鼻を押さえていた。

「他には何も？」

「ええ。ごめんなさいね。」

するとピンポンとインターホンがなった。

母親は刑事が来たと告げたので、仕方なく帰る事にした。

一応、龍の携帯番号のメモを渡して。

3人は小野先生の自宅を確認した後図書館へと向かった。

図書館は住宅街の中に立っており、公園もあることから利用者も多い。

図書館の中に入り、奥に進むと自由に本を読んでもらうために机と椅子が設置しており、窓からは小野先生の自宅が丁度見える。

しかもスモークガラスであるため、こちら側からは見えるが向こう側からは見えなくなっている。

3人は、小野先生の自宅が良く観察できるところに座り、話し合った。

「俺が小野を見ておくれ。何たって俺の視力は1.5だからよ。龍は大好きな天野さんとも話してな。俺が席をはずす時は晴起に頼むからよ。」

「だ・か・ら、天野さんのことなんて好きじゃないってば。でも、

待つてるかもしれないからすぐに送るよ。」

そついうと龍は意識を集中させた。

「天野さん聞こえる？」

「聞こえるわ！待ってたのよ。こっちから話しかけることが出来ないからどうしようかと思っていたところ。」

「ごめんね、昨日遅くまで考え事してたら朝起きれなくて。それで何か気付いたことはある？」

「それがね、昨日言ってた展望台がどこにあるか分かったの。あれはN小学校の屋上にあるの。」

龍はすぐにN小学校の地図を晴起にパソコンに出してもらった。

「それで何か他に目印になる物はない？」

「それが窓が小さすぎてほとんど見えないの。でも方角なら分かるわよ。展望台が校舎の左側にあるから…南西、そう南西の位置にこの建物があるわ。」

「了解。晴起に調べてもらっているから近いうちに助けに行くよ。」

「ありがとう。待つてるわ。それより何か面白い話でもして。退屈で仕方がないの。」

龍は照美の家に行った話や今日ベッドから落ちた話などをし、一度会話を中断することにした。

「晴起、何か分かったか？」

「それが小野先生の自宅からN小学校は結構距離があつて展望台は見えないし、展望台からの方角は北になるんだ。どうなっているのかさっぱりだよ。」

「今で3時間経つけど小野の奴は全然出てくる気配ないぞ。」

「どうすればいいんだ…。」

それから夜になるまで待ったが、小野先生が現れることはなかった。

そして家に帰り、皆でご飯を食べている時だった。

テレビに速報という文字が流れ、

「ただいま入りましたニュースをお伝えします。今日の5時頃、×県立H高校で男性のバラバラ遺体が発見されました。小野正さんであるとみて身元を確認しているようです。小野正さんは少なくとも死後2日経っている模様です。警察は女子高生連続殺人事件と手口が似ていることから関連性を調べる方針です。」

「何だつて…。俺たちの高校じゃないか。」

他の2人も龍と同じ気持ちのようだ。

「それじゃあ犯人じゃなかったってことか。龍ごめん、小野先生を疑つて。これまではこんなことなかったんだけど。つてことは、小野先生の意味が全く書かれていなかったのは死んでいたから…。」

「じゃあ誰が犯人なんだ？」

3人はうーんと唸って考え込んだ。

その日は何も思い浮かばず、疲れもあったため明日に賭けることにした。

「小野先生が殺された。早く天野さんを助けないと。」

龍は独り言を言って眠りに落ちた。

## 第7章：解決

2月12日（日）、この日は3人とも7時に起きた。

すっかり朝ごはんを食べ、今日はどこに行こうかと悩んでいた時、突然龍の携帯が鳴り出した。

番号はどこかの家から。

「はいもしもし。」

「あつ、もしもし。照美の母です。お早う。」

「お早うございます。どうしたんですか？朝早くから。」

「それがさっき思い出したことがあるの。」

「何ですか！？」

「照美ね、そういえばO・Tがどうとかってぶつぶつ言ってたの。何かの役に立てばと思って。まだ警察にも言っていないのよ。」

「それはすごい手がかりですよ。ありがとうございます。何としても助けますから。それじゃあ。」

電話を切るとすぐに翔太と晴起に事情を説明し、必死に考えた。

「そういえば今までに殺された子もO・Tに会って言ってたな。なぜそこに気づかなかったんだ！それにしても、何かの暗号か？それともイニシャルか？…なんだろう？」

晴起は頭をぐしゃぐしゃと掻いた。

「小野の奴だったらO・Tなのにな。」

翔太はさもおかしそうに言った。

「何で？」

「それは小野先生、つまり小野ティーチャーだからだよ。笑えるだろ？」

龍の顔は笑っていなかった。むしろ尊敬のまなざしを送っていた。

「それだよ！天野さんは生徒で、しかも友達が少ない。つまり彼女を簡単に呼び出せる人物。それは先生しかない。ってことはOだから、お・お・小野、岡……？岡だ！岡は担任だし、理由は簡単に作れる。晴起、岡の家を調べて！」

「分かった、ちょっと待って。えーと、岡、岡っと。あった。丁度、N小学校から南西の位置にある。」

「ビンゴだな。早く行こう。俺の指が火を噴くぜ！！」

3人は早まる気を抑えながら走った。岡先生の家に着くと、門を開け、翔太がインターホンを押そうとした時、ガラスが割れる音が聞こえてきた。

「俺が見てくるから、その間に岡先生を呼び出しておいて。」

龍が庭に行くと、1つの消しゴムが落ちていた。

それはクマの絵が描かれているかわいらしい消しゴムで、見覚えがあった。

それはまさしく照美の消しゴムだった。

その間に翔太はインターホンを鳴らし、岡先生と話していた。

「安倍と森永どうしたんだ？」

「えーと岡先生に天野さんのことについて聞きたいと思ひまして。」

「天野のことは知らないな。今も連続誘拐犯のところにいるんじゃないのか？早く見つかるといいな。」

「先生、なぜ連続誘拐犯と知っているのですか？」

「それは…ニュースでやってたからだ。」

「本当は先生が犯人じゃないのか？」

翔太は声を荒げた。

「教師に何てこと言うんだ！さあ帰りなさい。」

「分かりました。また来ます。」

翔太と晴起が門を出た後、龍がいないことに気付いた。

「あれ？龍は？」

「庭にいるんじゃないのか？…行ってみようぜ！」

翔太は言うなり、庭の方へと駆け出していった。

「しょ、翔太！待ってよ！」

遅れて晴起も後を追った。

すると、庭には険しい顔をした龍がいた。  
龍の手には消しゴムが握られている。

突然、頭に龍の声が聞こえてきた。

「翔太、晴起！天野さんはこの中にいる。」

龍の目線の先には1つの小さな窓ガラスがあった。  
しかし、真ん中が割れていて赤い雫が垂れていた。

「あれは…血？」

「そうみたいだ。天野さんが危機を感じて割ったらしい。どうやって助けたらいいんだ…。」

「そういう時は俺に任せろ！」

翔太はそう言うと、壁に向かって指を鳴らした。  
指からは巨大な火の玉が出た。

その火の玉が壁に当たった瞬間、壁が一瞬で焼け、崩れ、穴が開

いた。

「どうよ！すげーだろ。」

「…す、すっげーよ。何時の間に修行したんだよ。」

晴起が感心していると、龍が突っ込んだ。

「そんなことより早く行こう。天野さんが待ってる。」

「はいはい。龍の愛しい人のために僕は戦うぞ！その前に警察に連絡しておこう。」

晴起が警察に連絡している間に、龍と翔太は乗り込んだ。

時は少し戻り、翔太と晴起が帰った後、岡 雄一は、

「あいつら、なぜ分かったんだ？それよりも早く天野を始末しなければ。」

雄一は、玄関の隣の部屋に入り、奥に置いてある本棚の中の一冊を奥へと押した。

すると、本棚がスライドし、1つの扉が出現した。扉を開けると、照美が手を赤く染め、必死に痛みに耐えていた。

「お、お前！何をしたんだ？」  
窓を見ると、真ん中が割れていた。

「くそっ！腕をもつときつく縛っておくべきだった。」

「…お、岡先生？何でここに？もしかして、あの日呼び出したのは先生？」

「そうさ！気付くのが遅かったな。殺したい奴を呼び出すのに本名を教えるバカはいないからな。O・Tって良く出来てるだろ。」

「そ、そんな…。だ、誰か助けて。」

照美は恐怖のあまり大きな声を出すことは出来なかった。

「そんな顔をしなくてもすぐに終わるよ。」

雄一の手には、日本刀が握られていた。  
刀を抜き、鞘を捨て、両手で構えた。  
そして照美の前に立ち、刀を振り下ろした。

「龍君！助けて！」

照美は心の中で叫んだ。

「その気持ち、確かに届いたぜ！」

ふと、そんな言葉が頭に響いたような気がした。

すると突然、壁が揺れ、穴が開いた。

「な、何だこれは！だ、誰だ？」

「先生、俺だよ！」

翔太が自分を親指で指しながら言った。

「あ、安倍！こんなこととして済まされると思うのか？っていうかどうかやった？」

「こうやったんですよ。」

そう言つと、指を鳴らした。今度は小さな火がすごいスピードで雄一に向かって飛んだ。

雄一は反応できず、火の玉に吹っ飛ばされた。

雄一が起き上がる前に、龍が照美を抱きかかえ、晴起と翔太の隣に下ろした。

「ありがとう。安倍君、森永君、…龍君。」

「良いつてことよ。…ん？何で龍だけ下の名前なんだ？」

照美は気付き、耳まで真っ赤になっていた。横を見ると、龍はもつと真っ赤になっていた。

「おい！お前ら、何呑気に話してる！こうなつては1人も帰すわけにはいかないな。」

雄一は日本刀を持ち直し、4人目掛けて走り出した。

翔太が指を鳴らそうと構えたが、雄一の姿はなかった。

「どこ行つた？」

ふと、気配を感じて翔太は後ろへと跳んだ。

飛ぶ前にいたところには、雄一が立っていた。

「なかなかいい感覚してるね。実は私も能力者なんだよ。姿を消すことが出来るんだ。すばらしい能力だろ！この能力であの邪魔者も排除したのさ。」

4人は誰のことを言っているのか分からなかった。

「何だ？分からないのか？小野先生だよ。天野をさらった後に、あいつに見つかつてね。」

「お前が小野先生を殺したのか！」

龍は、怒気を露にした。

「神武が起こつた顔を見たのは初めてだな。まあ話はここまでによ。君たちには死んでもらう。」

翔太が開けた穴から外に逃げても良かったが、外に被害が及ぶのを避けたかったため、3人は外に出ようとはしなかった……晴起を除いては。

晴起は、恐怖のあまり、逃げ出した。

雄一は姿を消し、龍目掛けて日本刀を振り下ろした。

龍は横に飛び、攻撃を回避した。

次も、その次も。

不思議に思った雄一は、

「なぜだ？なぜ避けることが出来るんだ？」

口を開いたのは照美だった。

「それは私の能力のせいですよ、先生。私の能力は人の能力を打ち消すことが出来るの。しかも永遠に。もう先生は能力を使えないわ。」

「何だと！くそっ！まずは天野！お前から死ね。」

雄一は、怖い表情で照美に向かって突進した。

翔太は雄一に向けて火鉄砲を放ったが、焦りのあまり関係ないところに当たった。

「くそ！全然当たらねー。」

照美は雄一の気迫に押されて動けずにいた。

照美に刃が当たりそうになった時、

「やめろ！」

雄一の頭に響いた。

雄一は突然のことでびっくりし、動きが一瞬止まった。

そのチャンスを龍は見逃さなかった。

雄一の後頭部を鞘で思いっきり殴った。

雄一は倒れ、晴起によってパソコンのケーブルで手足を縛られた。

もちろん雄一は生きているはず…。

5分後、警察が到着し、雄一は逮捕された。

4人は事情聴取を受け、開放されたのは午後8時を廻ってからだった。

結局、壁の穴については話さなかった。

それは、雄一の家から爆弾が見つかったからだ。

「やっと解決したな！俺ってば大活躍じゃねー？」

「そうだな。翔太にはかなり助けられたな。もちろん晴起にも。それに比べて…はあ。」

何を言おうとしたのか理解した翔太と晴起は、龍に声をかけようとしたが、

「そんなことないよ！龍、…神武君もよく頑張ったよ。それにカッコ良かったよ。」

「そ、そうかな？ありがとう。そうだ、手は大丈夫？」

「うん、全然痛くないよ。」

本当は痛かったが、心配かけまいと思い、嘘をついた。

翔太と晴起は2人きりにしようと、じゃあと言つとさつさと帰ってしまった。

「あの2人…。俺が家まで送るよ。」

「ありがとう。」

照美は顔をほころばせた。

照美の家に行くと、両親は家の外で待っていた。

母親は、照美を見つけると走り、照美に抱きついた。

そして大きな声で子供のように泣いた。

龍は両親にかなり感謝され、食事に誘われたが、3人で食べて欲しいと言って断った。

そして、そのまま帰宅。

家に着くと、疲れが押し寄せ、そのまま眠りに落ちた。

## 最終章：告白

2月13日（月）、龍、翔太、晴起は、感謝状の受賞式に出席するため、学校を休んだ。

朝から3人は大変だった。

新聞の1面に載ったために、携帯電話は鳴りつ放しだったり。外に出たところで報道陣が待ち構え、インタビューを迫られたり。道行く人にサインを求められたり。

警視庁に着いた頃には、2時間経過していた。

「はあー、やっと着いた。結構時間かったな。」

「そうだね。もう疲れたよ。帰ろうか？」

「いやいや待て！ここまで来たんだから。もう少しの辛抱だよ。」

龍は晴起を何とか引き止め、それからまもなくして授賞式が行われた。

3人は緊張していたが何とか終わった。

授賞式終了後、晴起の家で受賞パーティーが行われた。

飲み物はもちろんカルピスで。

「カンパニー！！」

3人は自分たちの武勇伝について遅くまで語り合った。

そして…運命の2月14日（火）。

この日は、全国の男子が大いに期待する日でもあり、女子も大いに気持ちをぶつける日でもある。

しかし、龍は全然期待してはいなかった。  
今まで期待しすぎて、ショックが大きかったからである。

晴起は毎年張り切っているが全然ダメ。

翔太は興味がないが、沢山のチョコをもらっている。

この日も、3人とも今まで通り登校した。

有名人になったおかげで視線を浴びることは多くなったが。  
靴箱に到着した3人に待ち受けていたのは、例年通りの結果…ではなかった。

翔太は例年通り、沢山のチョコが詰まっていた。

翔太はそのチョコを靴に詰め、その中の1つを食べ始めた。手

紙は見ない主義らしい。

晴気の靴箱には、1つも入って…？いや、1つ入っていた。晴

起は飛び上がって喜んで、龍に自慢し始めた。

手紙には、

「貴方のことが好きです。放課後、体育館裏で待ってます。」と書いてあった。

それを読んだ晴起は…泣いていた。

「う、う、うわーん。生きてて良かった。龍、翔太、ありがとう！」

「いやいや、俺たちに感謝されても…。」

龍と翔太は苦笑い。

「ところで龍は？天野さんからのチョコはあった？」

龍は自分の靴箱を覗いた。

「……何も…ない。」

「マ、マジか…ドンマイ。」

3人のテンションは一気に下がった。

もちろん龍は期待していなかったが、

心のどこかで照美に期待していた。というよりも好きになっていた。

そして…放課後。

どのクラスの男子もそわそわとしていた。

すでに告白を受けた者、今から告白を受ける者、帰り道に期待す

る者、夜に電話がかかってくることを期待する者など、様々な感情が渦巻いているようだった。

晴起も時間が迫ってくるにつれて、緊張の色が隠せなくなっていた。

授業で当てられても関係ないことを答えたりしていた。

晴起はホームルームが終わると、一目散に出て行った。

翔太と龍は晴起の後を尾行し、体育館の影からこっそりと覗いた。

10分ほど待つと、向こうの廊下から歩いてくる女子生徒が現れた。

その女子生徒が近づくにつれ、容貌が明らかになってきた。

その子は、学校で一番人気とも言われている天城院 桜である。

翔太と龍は目が飛び出るほど驚いた。

あの天城院さんが！？という疑惑と、晴起は実はすごいのでは！？という眼差しの両方が駆け巡る。

桜は晴起の前まで来ると、

「あら、あなたもどなたかと待ち合わせですか？」

と言った。3人は耳を疑った。

晴起は、桜に朝もらった手紙を見せた。

「実は、僕の靴箱にこの手紙とチョコが入っていたんです。」

桜は手紙を見ると顔を歪めた。

「どうして？どうしてあなたが持っているの？言いなさい！それは私が書いた手紙よ。私の愛おしい殿方にお渡ししたはずですよ。」

「そんなこと言われても…。僕の靴箱は右端の下から2番目ですよ。そこに入れたんでしょ？」

「そうね…え？私が入れたかったのは、右端から2番目の下から2番目ですわ。」

「それって…もしかして…龍の靴箱じゃあ…。」

「あなたご存知ですか？龍様のこと。あなた確か…新聞に載っていませんでした？龍様のお隣に。」

「ええ、載っていましたよ。事件を解決した内の1人ですから。」

「龍様はともかく、あなたみたいな人が解決できるとはね…。」

桜はとても軽蔑するような眼差しを向けた。

それに我慢が出来なくなった龍は飛び出した。

「晴起を軽蔑する奴のことなんか手紙なんて貰いたくねえな。」

「りゅ、龍様！いつからそこに？」

「ずっとここにいたよ。そいつを応援するためにな。」

「まあなんて心御優しい御方！ますます気に入りましたわ。龍様、私と付き合って下さいませんか？」

「断る！」

即答だった。翔太は影に隠れながら、頷いていた。

「なぜですか？私と付き合えば、学校中の視線は私たちに釘付けですわよ。」

「俺は、友達を傷付ける女とは付き合いたくない。」

「…ひ、酷いですわ。…でもまあ、今回は引き下がりました。私はもっと貴方のことが好きになりました。必ず私の殿方になって頂きますから、お忘れなきよう。では御機嫌よう。」

桜は何事もなかったかのように去って行った。

「嵐のような女だな…。」

翔太は聞こえないように呟いた。

ところで、晴起はというと、こちらは何事もなかったかのようにケロッとしている。

「あーすっきりした。女子と付き合うのはまだ先で良いや。疲れるからね。龍ありがと。」

「いや、別に大したことしてないからね。」

「これから大変なことになりそうだな。」

龍は楽しんでいるのか、悲しんでいるのか、分からない中途半端な表情で言った。実際のところは龍しか知らない。

3人は一緒に帰るため、体育館裏から校門の方へと歩いていった。

すると突然、

「龍くーん。」

龍は自分ではないと思い、無視した。

「龍くーん。」

自分かもしれないと思った龍は、声のした方へと向いた。

そこは龍のクラスがあった。窓には1人の女子、照美が立っていた。

龍は何かの見間違いかと思ったが照美だった。

そして大きな声で叫ばれた。

「龍君！私、あなたのことが好き！大好き！宇宙で一番好き！こんな私で良かったら…彼女にしてください！」

あまりの大きな声に学校中が龍と照美に注目した。  
もちろん天城院 桜も。

緊迫した雰囲気の中、誰一人として口を開ける者はいなかった。

そして…龍も大きな声で叫んだ、テレパシーで。

「俺も照美のことが好きだ！大好きだ！宇宙で一番好きだ！よろしくお願いします！」

龍は照美にだけ聞こえるようにテレパシーを送った。

周りは何時返事するのかワクワクしていたが、急に窓から照美がいなくなったことで、ふられたのだと思い、皆、哀れみの表情だった。

天城院 桜を除いて。

桜は当たり前だというような表情で勝ち誇っていた。  
しかしその表情も直ぐに崩れた。

靴を履き替え、桜の横を通り越して、龍の許へと走った。満面の笑みで。

そして龍の許へと着くと、いきなり抱きついた。

周りは何が起こったのか理解できずにいた。

近くにいる者同士で、返事を聞いたかどうか確かめ合っていた。

桜は悔しそうに地団太を踏んでいた。

龍と照美はこの状況から抜け出すために、翔太と晴起に別れを告げ、早々と立ち去った。

この余韻に2人きりで浸るために。

終

## 最終章：告白（後書き）

神明 朱雀です。読んでいただいて有難うございました。君に届け2を執筆しようかどうか迷っています。ご意見、ご感想ありましたら、気軽にお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7014d/>

---

君に届け

2010年10月9日13時51分発行